【論文】

プロティノスの気概論

――『エンネアデス』Ⅳ四・二八――

中村　公博

1　はじめに

プロティノスが『エンネアデス』のいくつかの箇所で展開している、気概（θυμός）あるいは気概的部分（τὸ θυμοειδές）についての論は、古代ギリシア哲学において伝統的な「魂の部分」の問題とも関わりつつ、独自の様相を見せていると思われる。

この論文が目指すのは、『エンネアデス』の中でも、プロティノスが気概について集中的に議論していると思われる『魂の諸問題について、第二』（Ⅳ四［二八］）の二八節[1]を取り上げて、それを分析することである。そこで、この節においてプロティノス自身が提示する気概についての問いを整理しておかねばならないが、その前に、二八節に先立つ一七節において彼は、気概とはいかなる働きか、端的に記していることを確認しておかねばならない。それは「自己防衛へ喚起する」（εἰς ἄμυναν παρακαλῶν）（17.15-16）というものであった。しかし、彼はこれに満足せず、二八節において、「自己防衛」の働きである気概を、自らの魂論の中で捉え直そうと試みているのである。彼は次のように問う。

（1）（a）気概は（欲望と同じように）身体に帰属するか否か
　（b）帰属するとして、その帰属先を身体のある部分に特定できるか否か
（2）（c）（気概が生じるのは、欲望と同じように、身体に）痕跡を与える、身体とは別の何ものか（つまり魂）があるからなのか
　（d）それともこの場合、気概は（魂の）植物的部分からも知覚的部分からも生じない独立したものか[2]
（3）（e）気概的部分があるとして、身体的諸器官に動き（怒り）をもたらすのは、気概的部分そのものか、その痕跡か[3]

いずれの問いに対しても、この論文の結論で答えられることになるが、これらの問いにおいてプロティノスが手がかりにするのは、欲望（ἐπιθυμία）である。それは「苦しむことから快楽を、欠乏から充足を」（20.28）求めることであるが、それは身体から始まるとプロティノスは考える。これより彼が考える欲望の基本構造とは、欲望は身体の受動（動き）であり、それゆえに

身体に帰属するが[4]、それは生命維持を司る魂の植物的部分（τὸ φυτικὸν）が身体全体に痕跡を与えた結果である[5]というものであった。欲望は身体が受動することであるが、その身体は単なる物体ではなく、これとは別の魂の植物的部分から「痕跡」（ἴχνος）を与えられて生かされている。この「痕跡」ある身体が受動することで湧き上がるのが欲望の原初的形態であり、これを認知するのは受動しない魂である。それは、魂と身体は別であるはずだが、欲望においては関わるのはいかにしてなのかという、IV四・一八節以降における課題に対する答えである。

欲望のこのような基本的構造を手がかりにしたとき、右記の一連の問いは、この欲望の構造が気概においても同様なのかそうでないのか、ということに集約できるように思われる。つまり、（1）は、欲望と同様に気概にも魂の身体（的部分）からの離存性を認めるか否か、ということであるし、（2）は、気概に欲望とは異なった魂の部分（機能）を認めるか、ということであり、そして（3）は、気概においても魂の身体への働きかけは欲望と同様なのか、ということである。

この点について、当該テキストにおけるプロティノスの考えの方向性を述べておくならば、まず、プロティノスは、気概と欲望は共通の働きと考え、これらをいずれも司るのは、魂の植物的部分であると考える。したがって、プロティノスは、いわゆる「気概的部分」を認めない。むしろ気概とはそうした独立した部分が司るのではなく、魂の植物的部分が魂の他の部分や身体との結びつきの上に成立するものである。

これについて、なぜプロティノスがそう考えたのかをテキストに基づいて解明する必要がある。プロティノスは気概のうち「怒り」を取り上げて具体的に分析しているので、これを理解することが、右記の解明に寄与すると予想される。

2　気概の身体的側面

気概について欲望との異同が問題になるのは、気概には欲望と重なる側面と重ならない側面があるからである。右で述べた「自己防衛」だけをみても、これが単なる快楽や充足の追求と同じだとは言えないであろう。正義のための「自己防衛」もありうるからである。怒りはそうした「自己防衛」としての気概の代表的なものであるが、これには二面性があることをプロティノスは（プラトンと同様に）理解している。彼は怒りが、身体が蒙る（たとえば「殴られる」）ことに対してのみならず、親類の別の誰かが蒙ることのように、他人の不適切な行為に対しても生じることを認め、それゆえに、怒りには「何らかの知覚と理解が必要である」と述べる[6]。つまり、怒りには、まず、身体が受動することから生じる場合（仮にこれを「下方起源」と呼ぶ）があり、これは欲望と基本構造を共有していると言ってよい。しかし、怒りにはさらに、他人が何か不正なことをなしたと思って起こる場合（仮にこれを「上方起源」と呼ぶ）があり、この場合「何らかの知覚と理解」が必要なはずならば、欲望のように知覚・理解なしのいわば盲目的な衝動として身体から湧き上がるもの[7]とは考えにくい。

つまり、気概が欲望と重ならない側面を重視すれば、「植物的部分からではなく、別のところから怒りは発生すると要求でき

よう」(27-28)。とりわけ知覚的部分あるいは表象的部分から気概は発生するのではないのだろうか。実際、当該テキストに先立つⅣ三[二七]・二三においては、「知覚的部分は或る仕方で判定する部分であり、表象する部分はいわば知的な部分であり、衝動や欲求は表象や思惟に付き従う」(Ⅳ3.23.31・33)という表現があり、気概も衝動や欲求と同じく、上位の魂から発すると考えることは難しくない。[8]

しかし、プロティノスは、そう単純には考えていないようである。その最大の理由は、欲望も気概もともに血液なしには成立しないという一種の生理学的知見を持っていたからである。それは右で言及したⅣ三[二七]・二三において以下のように記述されている。

植物的部分、すなわち、成長・栄養的部分も欠けてはいないのであって、この部分は血液によって養うのであるが、養う血液は血管の中にあり、血管と血液の源(ἀρχή)は肝臓の中にある。以上より、そのような植物的な働きをする力がそこに据えられることによって、魂の欲望的部分はそこに住むことが認められたのである。なぜなら、そう、「産み、養い、成長をもたらすもの」がそれらを欲するのは必然だからである。一方、希薄で軽く、鋭敏で純粋な血液は、怒りに適した道具(器官)であるから、その血液の泉—そこでそのような血液はそこで分泌されるから—つまり、心臓が怒りの沸騰に適した住まいとされているのである。(Ⅳ3.23.35・45)

ここでは、栄養をもたらすのは血液であり、その源が肝臓にあることによって、魂の植物的部分がそこに宿ることが確認された上で、欲望もそこに宿ることが認定される。なぜなら、植物的部分の生命維持機能は、肝臓と血液なしにはありえないし、生命維持に必要な栄養を欲することを必然的に伴うからである。そして、血液は怒りの道具でもあることから、その分泌元である心臓には、怒りすなわち気概も宿ると言われる。ここでは欲望が肝臓に、怒りが心臓に割り当てられているが、いずれも血液が道具的役割を果たしていることでは同じである。[9]

Ⅳ四・二八の記述がこれを引き継いでなされていることは、肝臓近辺が欲望の源であり、その理由として、植物的部分の活動がそこから始まり、そこで最も活発であることが確認されていることからも明らかである。[10] これを考慮すれば、気概についても、血液や胆汁の状態や病気や食事といった身体的状況によって怒りやすさが変わるといった証拠から、怒りの源が身体に帰属し、胆汁と血液がそれに生気を与えているという見解を導くことには一定の説得力が認められるであろう。[11] 以上より、欲望も気概も、心臓や肝臓を源とし、そこから分泌される血液や胆汁の働きに帰属することにおいてはほぼ同じであると言える。いずれも身体的に見れば、心臓、肝臓、血液、胆汁がなす生命維持の働きであり、これは「生物の組織を統合するもの」(34-35)、つまり魂の植物的部分の働きであるから、欲望も気概も共に植物的部分が司ることになる。

このようにプロティノスは、怒りのような気概について基本的には身体を源と考えている。しかし、「何らかの知覚や理解」

を必要とすると言われた上方起源の怒りについても、その源は身体だと言えるだろうか。そのためには「源（ἀρχή）」の概念を明らかにしておく必要があろう。右で引用したテキストにおいて「血管と血液の源は肝臓の中にある」と言われるときの「源」は、生理学的に言えば「分泌元」という意味に近く、それゆえに、血液を分泌する「泉」である心臓が「怒りの沸騰に適した住まい」とされている。したがって、欲望の「源」が肝臓であるのと同様に、怒りの「源」は心臓だと言える。しかし、魂の植物的部分が「源」であるとは言われていないことに注意が必要である。たとえば血流のような身体的動きの始まりである心臓が「源」なのである。そう考えると、「何らかの知覚や理解」を必要とするはずの怒りも、生理的な始まりはあくまで心臓をはじめとした身体にあることになり、上方起源と言えど、それは身体的に見ればいわば見掛けに過ぎないということになりそうである。

ところが、そのように考えると一種の困難が生じ、下方起源の怒りが、「非理性的に掻き立てられ表象によってロゴスを引き寄せる」（47-48）ことは不可能になってしまうのではないだろうか。心臓と肝臓、血液と胆汁が動いても、それが魂の植物的部分はおろか、それ以上の知覚や思考の部分にまで伝わると言える根拠はなくなってしまう。したがって、上方起源の怒りも、「ロゴスから発し、怒るのが本来の部分に達する」（48-49）ことは可能であっても、それが身体の「源」であるはずの心臓や肝臓の動きとは無関係になる。つまり、怒りにおいては、上方起源にしても下方起源にしても、魂と身体は独立し、相互に影響していないということになってしまう。

3　気概における身体と魂のかかわり

このように、プロティノスは、気概における魂と身体との独立性を示している。それは彼がⅣ四の一四節において、魂の植物的部分（「自然」）と動植物の関係について、「火」と「火によって暖められるもの」と喩えて以降、魂の植物的部分が身体から離存すると考えようと試みる方向にあることとも一致している。別の言い方をすれば、身体は魂の下位部分すら直接的に所有することはできないのではないかと考えているのである。しかしその一方で、彼は十八節以降、魂と身体の両者が関わる局面を提示している。それが「これこれ様の身体（τὸ τοιόνδε σῶμα）」という身体概念である。彼は二八節の最初から、この概念を「いわば生命を与えられた身体」と説明しつつ、この節において明示的にしかも何度も使用している。[12] これは言うまでもなくアリストテレス由来の概念であり、たとえば『デ・アニマ』一巻一章では「怒り」は、「これこれ様の身体」の受動様態であると捉えられ、そこではたとえば「復讐への欲求」という形相的要素が、たとえば「心臓の周りの血液の沸騰」という質料的要素の内にあると言われる（403a25-b3）、二巻一章でこの身体は、栄養摂取・成長衰退をするという意味で生命を持った自然的物体であると捉え直されている（412a14-17）。プロティノスはこれを受け継ぎながらも、Ⅳ四の一八節以降において彼独自の理解を示した。それは、身体は形相と質料の結合体というのみならず、魂の「痕跡」が加わったものであり、身体はあたかも火で暖められた空気のように魂の植物的部分から「痕跡」を与えられている。この「痕跡」

は暖かさに相当し、身体的生命を指している。このように「これこれ様の身体」が生きる身体であることは、二八節でも前提とされていることはすでに述べた（「1はじめに」参照）。しかし、暖かさは火でも空気でもないように、痕跡は植物的部分そのものではないし、物体そのものでもない。したがって、植物的部分は身体には内在しないが、その「痕跡」は身体に内在し、身体全体にいきわたりながらも、それぞれの器官にそれぞれの機能を発揮させるものである。

それらの機能を司るものが、「魂の部分」と呼ばれるものであるが、プロティノスの魂論においてそれは、植物的部分（が司る栄養摂取・生殖）、知覚的部分（が司る知覚・表象）、欲求的部分（が司る場所移動）、思考的部分（が司る思惟）……のごとく、アリストテレスの枠組みに近い序列をなしていることはよく知られている。その中で気概の位置づけは独特というべきであろう。気概は欲望と共に、植物的部分が司る栄養・生殖と同じ位置になり、知覚的部分が司る知覚・表象よりも下位に来る。それは、前章ですでに指摘したように、気概と欲望が、植物的部分の生命維持機能と密接に連関していることをプロティノスが生理学的事実に基づいて重視したからである。

このことは下方起源の怒りについての次の記述にも現れている。

> これこれ様の身体が作用を蒙れば、直ちに血液や胆汁が動かされ、知覚が生じた上で、表象が、魂をこれこれ様の身体の状態に関連せしめ、苦痛の原因となるものに直ちに向かわしめる。（39-43）

これは、怒りをいわば身体的反応として記述したものだと言える。そこでは、「これこれ様の身体」がまず受動すると、血液と胆汁が受動する一方、知覚・表象が生じ怒るという過程が想定されている。たとえば、殴られれば、心臓と肝臓が刺激されて血液と胆汁が沸き立って、身体全体を駆け巡る。そこでは植物的部分に直接の言及はないが、もし植物的部分がなければ、心臓、肝臓、血液、胆汁が連動すること自体生じない。ゆえに、気概が発生するためには、植物的部分が不可欠である。

ただし、この下方起源の場合でも、知覚・表象のような、栄養・生殖以上の機能が働くことが言及され、植物的部分が他の上位部分と何らかのつながりを持っているかのように記述されていることに注意すべきである。殴られたとき、殴られたことや殴った者を知覚しなければ、反射的に自己防衛することはできないように、魂の植物的部分は、知覚的部分なしに、単独で怒ることはできないのである。

このことを踏まえると、上方起源の怒りについての以下の記述も理解できる。

> 不正があきらかになったときには、それが身体をめぐってではなくとも、[13]思考を用いる魂が上から、かの仕方で怒る部分を、側近として持ちつつ、この部分は本来敵が現れればこれに対抗するものであったのだから、これを同盟者とするのである。（43-47）

ここで言及されているのは、身体が受動しない場合であるから、身体なしでも、魂だけで怒りが成立しうる可能性が認められている。しかし、この記述の重点は、「思考を用いる」魂は、不正を理解したとしても、それ自体で怒ることはできないということにある。つまり、「かの仕方で起こる部分」すなわち植物的部分を「同盟者」として伴わなければ怒ることはできない。逆の言い方をすれば、魂の植物的部分は、思考的部分なしに、単独で怒ることはできないのである。もちろんその怒りは植物的部分がその「痕跡」によって身体を動かすことなしには外に発現することはない。

> 両者［sc. 上方起源の怒りと下方起源の怒り］とも、植物的生殖的部分から生じ、その部分が快苦をいわば把捉できるような身体を形成し、身体を胆汁あるもの苦いものにしたのである。魂の痕跡がかくのごとき身体のうちにあることによって、身体は、不機嫌とか怒りのような動きをし、最初に自分が害を蒙ると、何らかの仕方で害悪を与えようとし、他のものもいわば自分と似たようなものにしようとするのである。（49-55）

これがプロティノスによる「怒り」の最終的な規定だとみなしてよい。つまり、およそ「怒り」が成立するためには、第一に魂の植物的部分が必要である。第二に、植物的部分が心臓、肝臓、血液、胆汁に痕跡を与えていることによって、心臓と肝臓が怒りの生理的な「源」となり、これから分泌された血液と胆汁が全身を巡るという身体の動きが必要である。その限りで、「怒り」は下方起源であると言える。第三に、知覚的部分や思考的部分といったより上位の魂の機能が必要であり、植物的部分と協働することが必要である。その限りで「怒り」は上方起源であると言える。

以上のような構造を、プロティノスは植物を例に出して説明しようとする。[14] もし怒りを司るのが植物的部分ならば、樹木には植物的部分があるのだから、樹木にも怒りもあるはずだが、そうならないのは血液や胆汁のような身体的条件がないからである。この条件さえ整えば、知覚がなくとも、苛立ちのような沸騰がいわば下方起源として生じ、さらに知覚があれば不正への対抗意識がいわば上方起源として起こったはずである。この説明は、植物について語っているように見えて、実質的には、植物的部分が下方の身体と上方の知覚的部分の両方向に向けてつながっていることが、気概の成立のためには不可欠であると語っている。つまり、気概において植物的部分は、それ自身身体ではないが、自らが生かす身体から働きかけられて知覚や表象にそれを伝える一方、それ自身知覚的・思考的部分でもないが、それから働きかけられて身体を動かすという役割を担っている。

4 「気概的部分」の否定

右記のような気概の構造は欲望と本質的には変わらないとプロティノスは考えている。[15] 気概も欲望も植物的部分が司るのであり、当該テキストにおいてプロティノスはいわゆる気概的部分も、欲望的部分も、独立したものとしては認めない。[16]

それは、プロティノスが、気概も欲望も「欲求（ὄρεξις）」とし

ては同じだと考えるからである。つまり、飲食物に向かうのか、不正に向かうのかという対象が異なるだけで、魂と身体の側からすれば、魂の植物的部分が身体を通して何らかの外部対象を求めるという働きとしては同じである。したがって気概的部分がありうるとすれば、それは、欲望的部分と共に、植物的部分の欲求的な側面を二つに区別したにすぎない。欲求とは、植物的部分が、自らの身体生命維持機能を、外部の何かを求める機能に結びつけて完成する働きである。[17] 気概はその派生形態であり、外部の何か――それは知覚対象（たとえば殴られたこと）でもよいし、思考対象（たとえば不正）でもよい――へと向かって自己防衛することだということになるだろう。

このように、プロティノスが気概的部分を否定し、植物的部分に集約させたのは、気概とは、魂の植物的部分が身体と魂の他の諸部分に関わる結果であると説明すれば、これを魂の独立した機能として説明する必要がなくなってしまうからである。これは、プラトンの魂三分説を、実質的には二分説に類同化するものであり、[18] 三分説における気概論からすれば、その豊かさを失っていると評されるかもしれない。しかし、そのかわりに、プロティノスの気概論は、魂の植物的部分とそれより上位の部分（知覚的部分、思考的部分）と身体とを分離・区別した上で、改めてそれを結びつけるという意義を持っていると評価できる。[19] プロティノスの考える気概とは、魂だけでも身体だけでも成立するものではなく、魂の諸活動と身体の運動との結びつきの上に成立するものである。その結びつきにおいては、魂の諸活動があたかも一本の鎖のように一体性を保った序列をなしつつ、身体の動きに反映している。

こうした反映について、魂の「痕跡」という表現ほど適切なものはない。それが心臓のあたりにあると言われても何ら不合理ではないとプロティノスが最後に念を押すのは、[20] 気概において血液の動きの身体的始まりが心臓だからである。このとき、植物的部分の「痕跡」によって「これこれ様の血液」が身体全体にいきわたってその生命を維持している。しかし、植物的部分そのものは、そのありかを身体的部分に限定されないままに、同様に身体的部分に限定されない知覚的部分や思考的部分と結びついている。「痕跡」のようなプロティノス独特の用語法は、こうした全体像を踏まえれば、いわば「そうとしか表現しようのなくなる」ものであると考えるべきである。

5　まとめ

以上の考察の結果を、最初に挙げた問いに対して答える形でまとめたい。

（1）（a）気概は、欲望と同じく、身体に帰属する。
　（b）その帰属先は、欲望と同じく、身体全体であるが、身体の動きの始まり（「源」）を心臓・肝臓に特定することは可能である。

（2）（c）気概が生じるのは、身体とは別の魂の植物的部分が、身体に痕跡を与えて生かすからである。
　（d）気概には独立性はない。それは植物的部分の派生形態である。

（3）（e）気概的部分はない。身体的諸器官に動き（怒り）をもたらすのは、植物的部分の痕跡である。

プロティノスは、二八節において気概における下方起源と上方起源の二面性を整合的に説明しようと試みたと言える。気概は、欲望と同様に植物的部分によって生かされる身体から（「下方から」）湧き上がる一方で、植物的部分が知覚・思考的部分から（「上方から」）働きかけられて、身体を動かす形でも生じる。これは、まず、心臓・肝臓・血液・胆汁といった身体に関する生理的事実を尊重し、次に、この身体を、植物的部分の「痕跡」を有する「これこれ様の身体」と捉え直し、さらに、この身体と、魂の諸機能とが協働するあり方を探る、という探求方法がもたらした成果であると言えよう。

【付記】

本稿は、新プラトン主義協会第十四回大会（二〇〇七年九月十六日、於・神戸市外国語大学）における口頭発表原稿を大幅に加筆修正したものである。

【註】

（1）以下、本文においても註においても、引用にあたって行数のみ記されているものは、すべてⅣ四の二八節からのものである。テキストにはOCT（editio minor）を用い、特に注記のない限り、この読みに従っている。なお、引用中の［　］内は、中村による補足である。

（2）以下の引用内での（　）は本文中の記号に対応する。「（1）（a）気概の源も、あるいは気概のすべても、このような［生命を与えられた］身体に帰属するものと認めるのか、（b）それとも身体の或る部分―たとえば、このような［生命を与えられた］心臓とか、死んでいない身体の胆汁とか―に帰属するものと認めるのか。（2）さらには、（c）［気概は、身体とは］別に魂の痕跡を与える(*)ものがあってのことなのか、（d）それとも、気概の場合には、これつまり気概は何か一つの［独立した］ものであって、もはや植物的部分あるいは知覚的部分からも生じないものなのか。」(5-10)(*)テキスト八行目の二つ目のコンマを削除し、十一行目の欲望についての記述とパラレルになるようにする。

（3）「（3）（e）気概的部分から由来する痕跡が心臓、あるいは何か他の部分［e.g. 肝臓］辺りで合成体に動きを完成し与えるのか。あるいは、この（e）場合、痕跡ではなく、気概的部分そのものが怒ることをもたらすのか。」(19-21)

（4）（4）「我々は、欲望の源や快苦――これらは受動であり知覚ではない――を、いわば生命を与えられた身体の中に認めた」(2-5)

（5）「確かに、先ほどの［sc. 欲望や快苦の］場合には、植物的部分が身体全体にわたって、身体全体にその痕跡を与えたのであった、そして快苦も全体に及び、充足への欲望の源も全体に及んでいた。」(10-14)

(6) 「我々が怒るのは、およそ身体が蒙るものについてのみならず、親類の別の誰かが蒙るものについても、そして一般に人が何か不適切に為したことについてでもあるのは、まあ明らかである。ゆえに、怒ることにおいては、何らかの知覚と理解が必要である。」(22-26)

(7) 二〇節では欲望はこのように表現されている。「身体は自分から欲望するのであって――人はたぶん「先欲望」とか「衝動」と呼ぶだろうが――一方、自然[sc. 植物的部分]は他のものから他のものによって欲望するのである」(20.33-35)

(8) これを問題として最初に指摘したのは、Blumenthal (1971) pp.34-41 であり、Brisson(2005) もこの問題を意識している(Notice pp.46-48)

(9) この一節でプロティノスが示す生理学的知見が、ガレノスに由来し、アレクサンドロスを経由したものであると示したものが、Tielman(1998) である。

(10) 「肝臓のまわりの場所が、欲望の源であるとせよ。なぜなら、魂の痕跡を肝臓や身体に与える植物的部分はそこでもっとも働くから。またその活動はそこから始まるのだから、そこが源なのだ」(15-18)

(11) 「もし、怒りやすさが身体的な状態に随伴し、血液と胆汁において沸騰している人は怒りやすく、胆汁が少なく冷めていると言われる人は怒るのに遅く、また獣は、身体の組成によって、他の理由があって[怒りを持つの]でなく(*)、迫害されたと思われることによって、怒りを持つのであるならば、逆に再び人は、より身体的なものと、生物の組織を統合するものに怒りを帰着させるであろう。さらに、もし同じ人が、健康な時よりも病気の時の方が、怒りやすく、食べ物を食べている時よりも食べていない時の方が怒りやすいのならば、このことは、怒りや怒りの源がこれこれ様の身体に帰属することを明らかにするし、胆汁や血液が、いわば生気を与えつつこれこれ様の動きを与えることを明らかにする。」(28-39)(*) Igal(1985)p.309, Emilsson(1998)p.348,361 に従い、写本のまま読む。

(12) 類似の意味を持った表現も含めれば、二八節では、八回も使われている。

(13) OCT 第三巻末の修正(H-S[4])を受け入れる。

(14) 「一方樹木が植物的部分を持っているというのに、怒りを持たないことも驚くには当たらない。なぜなら、樹木は血液も胆汁も持たないから。というのも、これらがあったとして、知覚がなければ、苛立ちのような沸騰があっただけだろうが、知覚が備われば、不正を与えるものに対しても抵抗するような衝動が既にあったことだろう。」(59-64)

(15) 「これが、魂の他の痕跡[sc. 欲望]と同本質のものであるということの証拠は、身体的快楽を求めることの少ない人や一般に身体を蔑視する人が怒りへ動かされることが少ないということである。」(55-58)

(16) 「もし魂の非ロゴス的部分を欲望的部分と気概的部分に分割し、前者を植物的部分とし、後者の気概的部分を、血液・胆汁・合成体近辺にある植物的部分からの痕跡とするならば、欲望的部分がより先で、気概的部分はより後なのだか

ら、この分割は正しくなかろう。」(64-68)

(17) 「両者［sc. 欲望的部分と気概的部分］共に後なるもので、その分割は同じものから派生したものについてであるという風にしても何の支障もない。なぜなら、その分割は、欲求的である限りの欲求的部分についてのものであって、欲求がそこから生じたウーシア［sc. 植物的部分］についてではないから。かのウーシアはそれ自身は欲求ではないが、おそらく、自分から出てくる活動［sc. 生命維持機能］を欲求に結び付けてこれを完成させはするだろう」(68-73)

(18) プロティノスがプラトンの魂の三分説を受け入れていないことは Blumenthal(1971) の指摘（pp.21-25）以降、諸家が認めるところである。ただし、それと同時に、Ⅳ三、Ⅳ四の記述がプラトンの『国家』よりむしろ、『ティマイオス』をベースにしていることも指摘されている。本稿が扱えなかったこのあたりの事情については、斉藤（2000）が広い視野から記述している。

(19) その限りで、気概における植物的部分と知覚的部分との関係について Blumenthal(1971) の考察 (pp.34-41) はいまだに的確である。しかし、彼はこの本の各所（pp.23-24,63-64）で二八節を取り上げているにもかかわらず、プラトン的な心身二元論に規制されたせいか、魂の「痕跡」については、言及しながらも、その心身論における役割を重要視していないように思われる。その点では Brisson(2005) も同じであり、魂の「痕跡」を一貫して植物的部分と考えていて、その積極的意義を認めていない。これに対して Igal(1979) は、魂の「痕跡」にその積極的意義を認めた点で評価でき、Emilsson(1998) もその成果を十分に活用している。しかし、Igal が「痕跡」を「気概・欲求的部分」と特定することについては、なお慎重な検討が必要であると思われる。

(20) 「気概として外に現れる痕跡は心臓のあたりにあるというのは何ら不合理ではない。なぜならそれは魂がそこにあるということではなくて、これこれ様の血液の源がそこにあると言われるべきだから。」(73-76)

【文献表】

翻訳・註釈（テキストも含む）

Harder, R., Beutler, R., Theiler, W.(1962). *Plotins Schriften*, Band IIa, IIb, Philosophische Bibliothek, Hamburg.

Armstrong, A.H.(1984) *Plotinus Ennead IV* ,Text with an English translation, Loeb Classical Library, Cambridge, Massachusetts/London.

Igal, J.(1985) *Plotino Enéadas* III-IV, Madrid.

Brisson, L.(2005) *Plotin: Traités 27-29*, presentés, traduits et annotés par L. Brisson, Paris.

論文など

Blumenthal, H. (1971) *Plotinus. Psychology: His Doctrine of the Embodied Soul.* The Hague: Martinus Nijhoff.

Igal, J. (1979) 'Aristóteles y la evolución de la antropología de Plotino'. *Pensamiento* 35, 315-346.

Emilsson, E. K. (1998) 'Plotinus on the Emotions'. In *The Emotions in Hellenistic Philosophy*, J. Sihvola and T. Engberg-Pedersen (eds.), Dordrecht: Kluwer, 339-363.

Tielman, T (1998), 'Plotinus on the Seat of the Soul: Reverberations of Galen and Alexander in Enn.IV, 3 [27],23'. *Phronesis* 43, 306-25

斉藤俊之（2000）「魂の身体への配置――プラトンとプロティノスにおける魂の物体性――」学習院大学文学部研究年報第四六号、一～二四頁。